



いじめについて考えましょう

小学校の時は、いじめが親にも見えていたのだけれど、中学校になるとなかなか見えてこない。クラスの親と先生が集った時に、直接先生に「いじめがあるかどうか」尋ねたら、「ある」という答えでした。でも、学校全体では隠そうという方向にある。PTAの定例委員会で、学校側に「いじめについて親と認識を共通にした方がいいのではないか」と申し入れたのですが、「プライバシーの問題だから」と、学校はいじめの実態をなかなか明かしてくれない。どういういじめがあって、どういう対策をしているのかを話してくれない。今回の市内の中学生の自殺についても、近隣の中学校の保護者や子どもたちに対しては、何らかの説明をするべきではないかと言ったのですが。

私が危惧するのは、国が「いじめをなくしましょう」と言って、教育再生会議の提言のようなものを出してくるけれど、下手すると非常に子どもたちの管理に結びつくし、先生たちは何かすると批判されるということで消極的になってしまう。社会全体が萎縮していくような状況が出てきてしまうのではないか。

今回の中学生の自殺の問題について気になるのは、学校の先生や教育委員会がどのような対応をしているのかということ。今の社会的な風潮の中で、どんどん犯人探しのようなことや教師を追い詰めるようなことが起こるのはとても困るなあと思う。当該校の先生たちがとことん話し合ってほしいというのが私の願い。まず先生たちがじっくり話し合うこと、それから保護者とも話し合い、教育委員会もその中に入って話し合う。時間をかけた話し合いをする中で、学校の雰囲気が変わっていくことが大事なのではないかと思う。それをどうやって教育委員会の人たちにわかってもらえばいいのか。

最近、小学校の親と子どもが、いじめた子を学校にこさせないようにと裁判を起こしましたね。親としては、学校が何もしてくれないのでそういう手段に訴えて、学校が処置をしてくれることを願って...というニュアンスだったが、そこまできてしまったのかという印象を持った。教育再生会議の主張がそのままストレートに親の行動に出ているのかと思った。

いじめによる自殺をした福岡県の中学生のお母さんが、「いじめられた側の子ども気持ちももちろんだけど、いじめた側の子どもたちのケアを十分にしてほしい。どうしていじめなくてはならなかったのかといういじめた側の子どもの気持ちを十分に聞き取って、そこへのケアをしない限り、またいじめは繰り返される」というようなないような発言をしていた。

携帯のメールや掲示板で、実名をあげなくても個人が特定できるような形で誹謗中傷を集中させる。あるいは、一人の子どもの携帯に嫌がらせのメールを送り続

ける。そういう形のいじめが多くなっている。最近の特徴としては、携帯やホームページという今までとは違ったツールを使っている。

自殺にいたらなくても、いじめを受け続けた子どもの心の傷は深く、後々まで影響し、人とうまく関われなくなってしまう。

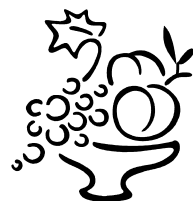
今はいじめる側に加担しないとクラスの中で疎外されてしまうような…。一人がいじめのターゲットになって、そのターゲットが順番に変わっていく。昨日の朝日新聞に載っていた千葉県の小学生の投書では、一人をいじめて学校にこさせなくすることを「落とす」というらしい。「あいつを落とせ」とか、休んでいた子が学校に出てくると「もう一度落とそうか」とか。次のように書いています。

……ゲーム感覚。本当に怖いと思う。「なぜいじめるの?」と先生が聞くと、いじめっ子は「楽しいから。」いじめる子も、見え見えのことはしないから先生は気づかない。いじめられた子も、心配をかけたり騒がれたりするのが嫌だから、親に相談しない。……

いじめられる理由があるわけではない。何らかのきっかけでいじめが始まると、いじているうちにその理由がつくられていく。「くさい」と言うけど、ほんとに臭いわけではない。でも皆が「くさい」と言っているうちに、いじている側はいじめられている子がくさいと思ってしまう。

自分が匂うのではないか、自分の口臭が気になって、教室に出られないとか、そういう神経症的な症状もある。

今うちの中学で、1クラス2人ぐらい不登校の子がいる。いじめだけが理由ではないだろうが、来たくない何かがある。



いじめて起きてから、「さあ話し合しましょう」という態勢では、 なかなか解決しない

教育再生会議の『いじめ問題への緊急提言』の中で、「教育委員会は、いじめに関わったり、いじめを放置・助長した教員に、懲戒処分を適用する。～東京都、神奈川県にならい、全国の教育委員会で検討し、教員の責任を明確に～」と書かれている。放置したとか助長したとか、誰がどこで判断していくのだろうか。これが安易に適用されて、どんどん教師を萎縮させていくのではないか。

子どもの心育てが、小さい時から感性を豊にしよう、人間を大事にしようという教育が昔よりきめ細かく行われてきているはずなのに、そこが社会全体でうまく実ってきていない。

学校できめ細かな教育を行っても、地域に帰ると皆バラバラ…という状況。一緒になって異年齢の子どもたちの中で心育てあっていくという作業はできなくなっていると思う。

うちの地域の学校では「子どもを外に出す時は危ないから、必ず親はついてるように」と言っているらしい。子どもが遊べば、けんかにもなるし、腕白もするし、というのが普通の生活だと思うけど、「けんかしちゃだめ、腕白しちゃだめ」と規制される。子どもたちが育つ場所が社会全体から失われている。学校でもそ

うだと思う。徹底的にけんかして、そこから学ぶことが多いと思うけど…。

教育再生会議がこんな提言を出したって、いじめはなくなるらない。

鹿川君や大河内君の事件の時に、当時の文部省が緊急アピールを出したり、調査をしたりしたけれど、何も変わっていない。むしろ深刻になっている。

提言に「教育委員会も、いじめ解決のサポートチームをつくる」とあるが、チームをつくること自体はいいと思うが、そこが指示を出すのは問題。指示を出すと、現場は形だけやることになってしまう。中身がない。報告書だけ出す。それだけのことになってしまう。

私は、学校で教育相談を担当することが多かったが、相談が持ち込まれたら、相談係がコーディネートして、関係する人たちに集ってもらい、問題解決のための話し合いをする。それだけで問題が解決するわけではないが、いろんな人が問題を抱えている子に関わることができる。しかしなかなか学校全体の問題にならない。意欲を持った人間が2・3人いないとできない。

昔うちの息子がいじめられた時、そのことをクラスのお母さんが教えてくれたし、懇談会でもそういういじめの問題についても発言してくれた。新任の担任は頼りなく、クラスの子どもたちはバラバラだった。そんな中でいじめ問題が起きて、先生はどうやって収めてよいかわからなくなっていた。だから、親たちは担任の先生と話し合い、またそういう先生を援助してくれなくては困るじゃないかと学年主任の先生のところにも行って、話をした。「学年全体で守ってほしい」と。その後教頭・校長のところへも行って、実情を訴えた。そしていつの間にかいじめは収まった。その当時は、学級や地域で親たちの情報交換があったけれど、今はそれがあまりないのではないか。

20年前デンマークへ見学に行って、その地の高福祉を見てきた。その時、ある人が「差別をしないという人権教育をどのようにしているのか」と質問したら、「そういうことは特にやっていません」というのが答えだった。「小さい時から、徹底的に仲良くするということをします」と。日本で何かことが起こると、教育というのが始まるでしょう。「心の教育」だとかね。形を持ってくる。一斉にやらせようとする。その結果、教師はかえって忙しくなって、本当に大切なことができなくなる。

忙しくなって人権どころじゃない！

人間として最低限の生活を送る権利が、先生に保障されていない！

先日テレビに出ていた先生は、……「ゆとりの教育」で授業時間数が少なくなったのに、一定レベルまでなくてはならないし、「考える授業」をしなくてはならない。それをやるのにすごく苦労している。放課後は部活をやらなくてはならないし、それが終わったら、不登校で来られない子どもたちに教材を届けに行き、それから明日の教材準備をするんだ……と

言っていました。

先生の超過勤務は普通のサラリーマンよりひどいと、新聞に出ていました。

学校全体で、先生たちが力を合わせながら対応していくという



ことも、いじめがあった時だけではなくて、他にもいろいろな問題があるし、授業研究についても必要だと思うが、先生たちがそんなに忙しかったら、できるはずがない。

わが子が2年生の時クラスでいじめがあって、いじめられた子のお母さんがやむにやまれぬ思いで、一緒に考えてほしいと懇談会の開催を要請したんですね。懇談会には、担任とクラスのほとんどのお母さん、校長・教頭も出席した。多くのお母さんたちが出席していても、常日頃の交流が密にできていないから、どうしてもうまくいかない。最初は誰の責任かという犯人探しの場になってしまう。皆にわかってもらおうとして、いじめられている側はその事実を具体的に列挙するし、校長・教頭は「担任の力不足で申し訳ない」と言って担任に責任転嫁するし…。いじめられた側のお母さんも「こんな責任追及する場にするとつもりもなかったし、いじめの事実を列挙するつもりもなかった。でも、皆に納得してもらうためにそんな話になってしまった。」と言っていた。でも、それは当然だと思う。いきなりそんな話になって、うまくいくなったら苦労しない。その後何回か話し合いを継続していくべきだったと今なら思うが、私も未熟でその時はどうしたら良いのかわからなかった。いじめが起きた時に、どのように話し合っていくかというのはとても難しい。

いじめて起きてから、「さあ話し合しましょう」という態勢では、なかなか解決しない。いじめはどこにでもあることとして、個別の事件についてではなくても、「いじめて何だろう」というようなテーマで、PTAでどんどん学習会をすべきだし、懇談会での話し合いもすべきだと思う。そうするとPTAの中で、いじめについての一定の共通認識を持つことができるだろう。

PTAの中で、いろいろ話し合いをしても、いじめる側の子の親が出てこない、なかなかいじめは解決しない。子どもたちをどうしたいのかというところで、親同士話し合えるといい。学年があがって解決したかのように見えても、その火種がまたいつ出てくるかわからない。火種が見えた時に、親同士がきっちり話し合いをするという習慣を持たないと…。



先生に対する社会の目が冷ややかになってきた 子どもに対する目も否定的になってきた

先生の余裕が全くない。先生が余裕を持つためには、学校の規模は小さいほうがいい。ピシッと管理する方が学校としては楽かもしれないが、つまらない話でもできるような先生がほわっとしているような時間があると、子どももゆとりが持てる。

70年代ぐらいまでは職員会議は議論の場だった。今は、ほとんど議論がない。その背景には職員同士に日常的な会話がないということもある。大人自身も人間関係がちゃんとできていない。学級崩壊などの問題が起きた時も、担任一人のせいにする。だから皆自分の学級の問題を公にしないで、抱え込んでしまう。

若い先生が「年配の先生や同僚の先生に自分の学級の問題を相談すると、自分の教育力を問われてしまう。だから悩みがあったって、絶対言えない」と言う。自分がうまくいかないところをうまくやっている先生の姿を見てまねをするなどしながら、教師として育てられてきた。今は、教員になる競争率が高くなって難しくなった分、教員としてのプライドがあって、聞くのは恥という雰囲気があるみたい。

昔はだるまストーブを囲んで教師が話し合うなど、職員室での居場所を作ってきた。今、職員室がそういう場になっていない。教師が互いに育てあえなくて、どうやって子どもを育てるのか。なぜそうってしまったのか。

上からやらなくてはならないことが次から次に下りてくるということも一つありますよね。いろいろな事件・事故が起こったりすると、責任追及という形で日本の社会が動いていく。その結果として管理が厳しくなっていく。定期試験のときは部活がないので教員は時間的余裕ができる。そこで教員の親睦のためのソフトボール大会を年2回行っていた。ある時校長が「やってはイカン」と。なぜかという「近所の目がある」から。「平日に教員がソフトボールをやって遊んでいると非難されるから」と。それだって校長が地域の人へちゃんと説明すればいいこと。形だけ繕っていくということを世間も求めるし、それに管理職も応じてしまう。

いつの頃からか、先生に対する社会の目が非常に冷ややかになってきた。「先生には長い夏休みがある！」という批判的な目に対応して、夏休みも学校へ行かなくてはならなくなった。行っても何もすることがないのに！

子どもに対する目も非常に否定的になっていますよね。子どもというのは放っておけば悪いことをするものだという子ども観。昔からそうなのだろうか？こんなに社会が子どもに対して寛容でなくなったというのは、最近のどのような気がする。

子どもの数が減ってきたから…。昔は保護者という立場の人間がワイワイいたから、お互い様みたいなところがあったけど。学校というのは不思議なところで、関わっているときはいいんだけど、そこから離れると批判の対象になってしまう。学校は教育の専門家なのだから、きちんと説明すればいいのに、サービス業になってしまっている。自分を低くすることにばかりエネルギーを費やしている。教育の専門家としての発信をして、地域の理解を求めてほしい。それなのに、批判されたら「対処します」ということを繰り返してばかりいる。

何かあった時、気がついたことを教えてくれる、相談にのってくれる、 そういう親同士のネットワークができていれば...

自分の子どもを守ることに、親たちが過剰反応している。「とても心配」だって。私は「パトロールだけでは子どもは守れない」と言うのだけれど、目に見えるものをやりたがる。親同士が顔つき合わせて、互いの子どもの顔・親の顔が見える状況を作っ



ていかないと。

学級で教師が音頭を取って、お母さんたちがまず知り合いになること。何かあった時、気がついたことを教えてくれる、相談にのってくれる、そういう親同士のネットワークができていれば...

中学校で土曜日にクラス懇談会を行ったら、30人近いお母さんたちが出席した。そういう場で、いじめについて話し合う。そこで話し合われたことを親は胸にして、自分の子どもと向き合う。そういう話し合いを重ねて、先生だけでなく親も一緒になって、問題解決に取り組む。先生だけではとても解決できる問題ではない。

教師からすれば、お母さんの顔が見えて、子どもとつなげて考えられるし、親からすれば、教師への理解が深まって、子どもの話も別の角度からとらえることができる。

地域で子どもたちと関わってきて見えてきたことは、悪さする子ほど気を遣っているということ。疎外感を感じている子どもが周りの子どもたちの気をひこうと思って悪態をついたりする。いじめる側の子どもたちの心の中には、いろんな思いが渦巻いているのだらうと思う。その思いを受け止めていけたらと思うが、どう関わればよいのか、試行錯誤している。学校でもそういう子どもとどう向き合うかというのは、先生一人ではわからないと思う。先生同士や、親と話しをしながら、皆で見つけていくしかないと思う。

子どもたちのコミュニケーション能力が落ちているからいじめが起きるのではないかと、コミュニケーション能力を高めるような授業をやるという。大勢いるところでは、子どもが言いたいことを呑み込んでしまう。コミュニケーションをとらなくちゃいけないということを押し付けるような授業にしてほしくない。

集団の大きさがとても関係あると思う。30人の集団だと、そこでものが言える人は限られてしまう。集団が小さくなればなるほど、ものが言える人が増えてくる。そう考えると、クラスの規模を少人数にしていくことが大切なのではないか。先生もたくさんいれば、担任に言えなくても誰か他の先生に言える。いろんな先生が遠慮なく関わられるような網の目のようなものができていく日常を作っていくことが大事だと思う。

犬山市でやっているような協同学習だと、少人数のグループの中でコミュニケーションをとりながら進める。そういう形で自然に身につけていく方がいいと思う。習熟度別授業は国際的に見ても時代遅れ。いろんな子がいて、いろんな意見を出し合って日常的にやって行く方が、コミュニケーション能力もつく。